

# P125 1361年正平南海地震に対応する東海地震の推定

石橋 克彦 (神戸大学都市安全研究センター)

## Inferred Tokai earthquake paired with the 1361 Shohei Nankai earthquake

Katsuhiko ISHIBASHI

Research Center for Urban Safety and Security, Kobe University, Kobe, 657-8501 Japan

●歴史上知られている7回の南海巨大地震(1605年慶長津波地震を除く)のうち4回(1099, 1707, 1854, 1946年)は, 東海巨大地震がほぼ同時か, 1日~2年程度先行して発生している(図)。これに対して, 正平十六年(南朝; 北朝では康安元年)六月廿四日(ユリウス暦1361年7月26日)の南海地震【宇佐美(1996)の『新編日本被害地震総覧・増補改訂版』(以下, 総覧)では056番でM8.1/4~8.5】については, 前にも後にもペアをなす東海地震は知られていない(総覧は, 1944年東南海地震的な正平十五年十月五日M7.5~8.0の地震を無番号で掲げているが, これは抹消すべきことが山本・萩原(1989)によって論証されている)。しかし, 史料をよく読むと, 2日か3日前に東海地震が発生した可能性が高い。

●総覧は, 055番に正平十六年六月廿二日の畿内諸国の地震を掲げ, 「この月18日より, 京都付近に地震多く, この日の地震で法隆寺の築地多少崩る。23日も地震あり。次の地震の前震か?」としている。もし本当ならば, 南海地震に顕著な前震が伴った唯一の例となり, 注目すべきことである。しかし実は, 18日の地震は低級史料に起因する虚像であり, 今村明恒以来の前記のような解釈は誤っていると考えられる。

●六月十八日の地震は, 『続本朝通鑑』に「丁酉地大震, 自是日日震動不止」と記されているだけである。この史料は江戸時代前期に幕府が編集した編年体の日本通史だが, 史料批判の精神が弱く, 出典を示さず, 厳密さを欠くといわれる。地震当時は『愚管記(A)』『後愚昧記(B)』という京都の公家の良質の日記が書かれており, 原本が伝わっているが, 十八日の地震は記録されていない。江戸時代中葉に柳原紀光が編纂した編年体の通史『続史愚抄』は, 各日毎に依拠史料を明示した厳密なものだが, やはり十八日の地震を記さない。

●AとBに記された地震の状況は以下の通りである: 六月は十六日に地震があった(B)のち, 廿一日酉刻(18時頃)に「近来更無如此之事, 消肝」(B)するような大地震があった。廿二日卯刻(6時頃)に「如昨夕」(B)大地震があり, 「其後大小動相続不休」(A)で廿三日も「度々地動」(B)した。廿四日寅刻(4時頃)に南海大地震が起こり, その後余震が続いた。七月四日申刻(16時頃)にまた大地震があったが, 「如此大動, 去月廿一日夕, 廿四日, 今日又也」(B)であった。そして, 「伝聞, 去月廿二日同廿四日大地震之時」に, 紀伊熊野社の社頭ならびに仮殿以下, 熊野三山の岩屋や秘木・秘石などが悉く破壊したという(A)。また, 廿二日の地震で法隆寺の築地が多少倒れた(『斑鳩嘉元記』)。

●以上を総合すると, 一八日から前震的・群発的な地震が続いて廿四日の南海地震に至ったというよりは, 廿一日夕方ないし廿二日早朝に熊野灘以東で東(南)海地震が発生し, その余震が続くなかで南海地震が続発したと考えるほうが自然である。被害記事からは廿二日早朝が東(南)海地震の本震だったようでもあるが, Bは廿一日夕方の方を南海地震と同じように強く感じている。廿一日と廿二日の地震が東海の2連発なのか, 前震・本震なのか, 本震・大余震なのか, 一方が陸の地震なのかは, 今は分からない。

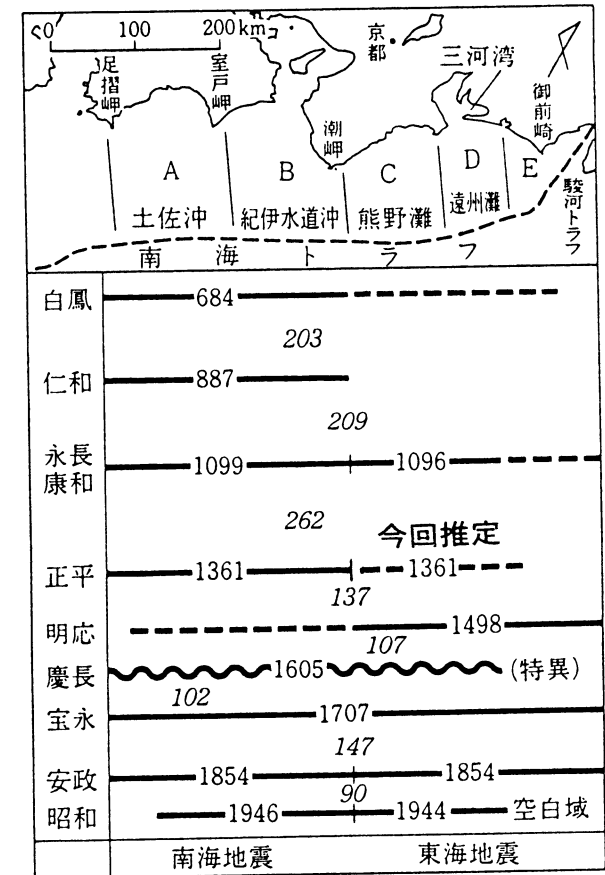


図. 東海・南海巨大地震の繰り返し。破線は可能性の強いことを示す。数字は発生年, 斜体の数字は発生間隔。石橋(1994)に加筆。